

聖書：使徒 17：10～15

説教題：熱心にみことばを

日時：2014年4月27日

パウロとシラスはテサロニケの町で迫害されてベレヤへとやって来ます。ベレヤはテサロニケから南西へ約 70 キロメートルほど行った町で、エグナチア街道からは外れた町でした。テサロニケでは反対するユダヤ人たちが暴動を起こしてパウロたちを襲おうとしましたが、ここまで来れば追いかけて来ないだろうと思われた町だったのでしょう。その二人はどうしたのでしょうか。パウロとシラスはそこに着くなり、ユダヤ人の会堂に入って行くと 10 節にあります。彼らは新しい町ではまずユダヤ人の会堂に行きましたが、そこに行って迫害されなかったためしはありません。そこに行けば、また反対活動や迫害が起こるでしょう。しかし休む間もなく会堂に直行して宣教する二人でした。テサロニケから命からがら逃げ延びて来たばかりなのに、まさに福音宣教のために自らをささげ切っているパウロたちです。

さて、このベレヤのユダヤ人はどうだったのでしょうか。11 節に、この町のユダヤ人は「テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで」とあります。この「良い」という言葉を新共同訳聖書は「素直で」と訳しています。つまり福音に対して開かれた心、あるいは真理に対する柔らかい心を持っている人たちだったということでしょう。

具体的に彼らのすぐれた点はどんなところに見られたでしょう。その一つ目は「非常に熱心にみことばを聞いた」点にあります。説教の聞き方にも色々あります。ただ漫然と聞くという聞き方。そしてここにあるように熱心に聞くという聞き方。「熱心に」というのは、真理ならすぐ受け入れる心の用意を持つてということでしょう。いつでもそれに飛びつこうというスタンバイの状態のことでしょう。私たちはどうでしょうか。私たちはイベントとか、旅行とか、コンサートに行く計画等があると、何日も前から楽しみにします。その日が特別な時となるように期待し、色々な備えをして当日に臨みます。それはまさに熱心に備え、熱心に臨むということでしょう。では礼拝でみことばを聞くことについてはどうでしょうか。お決まりのことだからとか、上の空で聞いているとか、お昼のことばかり考えているとか、あとどれくらいで終わるかとか時計ばかり見ているといったことはないでしょうか。もちろん一方には説教者の問題もあると思います。準備が不十分とか、内容が退屈であるという問題もあると思います。しかし今日の箇所は聞く側のことがテーマになっていますので、今日はこちらに絞って考えたいと思います。「熱心に聞く」というのは、期待して聞くことです。御言葉を聞く時に何か起きることを祈り願いつつ心を傾けて聞くことです。それがこのベレヤの町の人々の第一の特徴でした。

彼らのすぐれた点の二つ目は「聞いた御言葉が果たしてその通りかどうかと聖書を自ら調べた」点です。彼らは説教を聞いて終わりとはしませんでした。それが本当に聖書全体で言われ

ていることと一致しているかどうか、自分たちで確かめるという作業をしました。なぜこのことが大切なのでしょう。それは私たちにとって究極的に大切なのは神の教えであって、人間の教えではないからです。どんなに偉い先生が語っても、それが私たちの規範になるのではなく、大事なのは本当にそれは神の教えなのかというところにあるからです。ウェストミンスター信仰告白第20章2節には「神のみが良心の主である」という告白があります。私たちに対して権威を持ち、私たちの心を縛ることができるのはただ主なる神のみです。パウロが言ったから受け入れるわけではありません。有名な先生が言ったから受け入れるわけではありません。果たしてそれは神が言っていることか、ということが重要です。そしてその神の御心は聖書に客観的に示されています。ですから聞いた説教は本当に聖書全体のメッセージと一致するかどうかと検証されなければなりません。聖書のある言葉に訴えながら話しても本質からずれているという場合があります。エデンの園でアダムとエバを誘惑した時も、また荒野でイエス様を誘惑した時も、サタンは聖書のことばを使ってそうしました。ですから私たちは感情に流され、良く分からないけれども今日は何だか恵まれた～などと言って終わりにすることがないように、果たしてそれはその通りなのか、聖書と一致するか、聖書のバランスを逸脱していないか、調べなければなりません。ベレヤの人たちはそのことをしました。

そしてこのことは、万人祭司の原則とも関連があります。すなわち私たちは今や人間の仲介者を必要とせずに、一人一人が直接神に近づき、神との交わりに生き、また他者をとりなすことができるということです。歴史的にローマ・カトリックはそうは教えませんでした。信徒が勝手に聖書を解釈したらとんでもないことなる。メチャクチャなことを言い始めるに決まっている。だから信徒は教会が解釈した教えを聞いていればよろしい。一人一人聖書を持つなんてことをしたら危険である、としました。これに対してプロテスタントは一人一人が聖書を解釈することができる、と告白しました。ウェストミンスター信仰告白第1章7節：「聖書の中にあるすべての事柄は、それ自体で一様に明白でもなく、またすべての人に一様に明らかでもない。しかし、救いのために知り信じ守る必要のある事柄は、聖書のどこかの箇所ですべて非常に明らかに提出され、開陳されているので、学識ある者だけでなく、無学な者も、通常の手段を正當に用いるならば、それらについての十分な理解に達することができる。」もちろん聖書の中には難しいところもあります。面白いことにペテロはパウロの手紙を指して「その手紙の中には理解しにくいところもあります」などと言っているところもあります。しかし何でも学ぼうと思ったら、それなりに努力は必要です。語学を習得するにも、いきなり最初から全部が分かるわけではありません。辞書を引いたり、先生に教えてもらったりしながら身につけて行きます。聖書もある意味で同じです。先ほどの告白の中に「通常の手段を正當に用いるならば」とありました。これは聖書を繰り返し読むとか、通読するとか、説教を真剣に聞くとか、注解書などの解説を参考にするとか、信仰の先輩に教えてもらうなどのことを含みます。そうした普通の手段を経て、救いのために知り信じ守る必要のある事柄については十分な理解に達することがで

きるのです。もちろんこれと関わっているのは聖霊の働きです。聖霊は信者一人一人の内に住んでおられます。その聖霊に導いていただく中で聖書のメッセージを十分に理解することができる。そうして一人一人が借り物の信仰ではなく、自分の信仰をもって、確かにこれは神のメッセージである、聖書のメッセージと合致したものである、と確信するプロセスが必要なのです。

そしてもう一つ、ベレヤの人々のすぐれた点は「毎日聖書を調べた」という点です。私たちは一週間でどれくらい聖書を開いて、神のみことばに聞いているのでしょうか。一週間に一回、礼拝の時だけというのではあまりにも不十分でしょう。まして杉並教会の説教の時間は他の教会より短いと思います。とするなら益々この時だけ、聖書に触れるのでは足りな過ぎる。やはり日々御言葉に親しみ、自分で読む習慣なしに聖書の知識は深まりませんし、聞いたメッセージを聖書全体から判断することもできなくなってしまいます。私たちはなかなか忙しくて聖書を読むのが難しいと思いますが、キャンベル・モルガンはこう言ったと言います。「講壇で朗読する時の速さで聖書を読むなら、創世記から黙示録まで78時間しかかかりません。」ある人が、そんなはずはないと抗議したところ、モルガン師は「そう言う前にまずはご自分で読んでみたらいかがですか。」と言ったそうです。その人は家に帰ってやってみました。果たしてその通り、80時間以内に全部を読み終えたと言います。また新聞を端から端まで読むのが好きという人がいるものです。では日本語の聖書の文字数を朝刊と夕刊の文字数に置き換えたら、何日分になるのでしょうか。何とたったの5日間分程度だそうです。もちろん聖書はもっと意味を考えながら、立ち止まったり、祈ったりしながら読むものですからもっと時間がかかりますが、これは聖書全体を読むのは果てしなく難しいと思いがちな私たちにチャレンジを与えることではないでしょうか。

こうした結果、ベレヤの多くの者が信仰に入ったと12節にあります。これは当然の結果と言えます。神は聖書においてこそ、ご自身をはっきり示しています。聖書においてこそイエス・キリストによる救いを示しています。

さて、このような素晴らしいみわざが用意されていたベレヤでしたが、すべてがうまく行ったわけではありませんでした。やはりこの町でも反対活動・妨害活動が起きました。それはベレヤ人の中から起こったわけではありません。何とテサロニケのユダヤ人たちがベレヤでのパウロたちの活動の様子を伝え聞いて、追いかけて来たのです。そこでパウロは次の町へと送り出されます。パウロ一人がそうされたのは、彼が特に標的にされたからでしょう。パウロはアテネまで連れて行ってもらった後、急いでシラスもテモテも来てくれるようにと伝言します。アテネは次の重要な宣教地として考えていたのでしょう。そうして案内した人たちは帰って行ったと結ばれています。

以上のベレヤ宣教。前回のテサロニケ宣教と合わせて、二つの記事はどちらも聖書を強調しています。パウロはテサロニケで聖書に基づいて論じた、と2節にありました。また3節に聖

書から説明し、論証したとありました。パウロの説教は人間の体験とか、あかしが中心ではありませんでした。あるいは人間同士の交わり、あるいはムードが中心ではありませんでした。聖書こそ彼の説教の中心であり、武器でした。そして今日のベレヤ宣教。こちらでは聞き手のことが強調され、彼らは非常に熱心にみことばを聞きました。自ら聖書を調べました。しかも毎日そうしました。そして当然のように多くの者が信仰に入りました。私たちは改めて聖書こそ、このような祝福をもたらすものとして与えられていることを特別に尊び、感謝し、用いなくては！と思わされます。聖書に聞き、これを読み、これに接する作業はつらく苦しいものではありません。ダビデは詩篇 119 篇で言いました。「あなたのみことばは、私の上あごに、なんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです。」「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」ペテロはこう言いました。「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」この神の特別のギフトである聖書を私たちはさらに尊び大事にしたいと思います。いつもこれを開く時には大いなる期待をもって心と耳を傾けたいと思います。また自ら親しみ、聞いた御言葉を聖書全体の光の下で確かめたいと思います。また毎日この恵みをいただきたいと思います。これこそ神の生ける御言葉、また私たちを生かす神の言葉です。「聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。」(Ⅱテモテ 3:15)